伯林留學日記

伯林留学日記　上

昭和五十七年五月十日発行

著　者　山口青邨

発行者　足立龍太郎

印　刷　株式会社精興社

製　本　大口製本印刷株式会社

発行所　株式会社求龍堂

東京都千代田区紀尾井町三―二三文藝春秋ビル九階

伯林留學日記

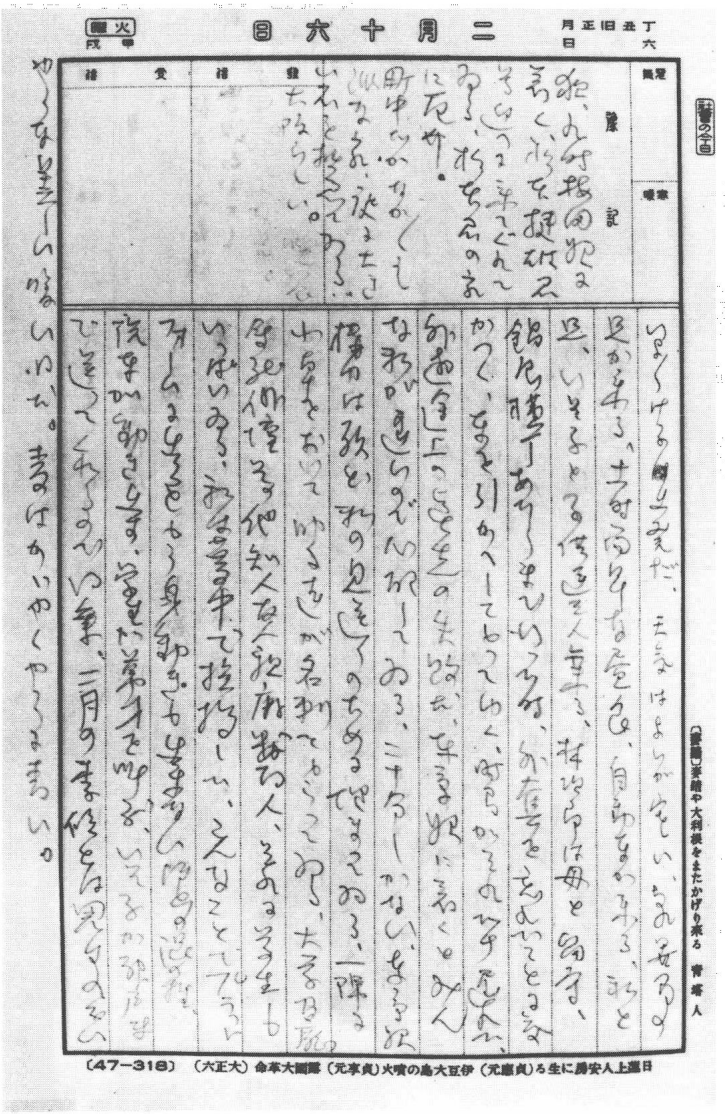
上

山口孝夫

求龍堂

日記原本　上段右：昭和12年　上段左：昭和14年　下段：昭和13年
（開かれている頁は六月五日～六月六日）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



日本出発の日、昭和12年２月16日の記

伯林留学日記　上

山口青邨

昭和十二年（一九三七）

二月十六日　（火）

いよ〳〵けふ出発だ、天気はよいが寒い、朝、笹間の兄が来る、十一時簡単な昼食、自動車が来る、私と兄、いそ子と子供達三人分乗、林次郎は母と留守。

鍋屋横町あたりまで来た時、外套を忘れたことに気がつく、車を引きかへしてもってゆく、時間がそれだけ遅れた、外遊途上真先の失敗だ。東京駅ではみんなが私が遅いので心配してゐる、発車まで二十分しかない、駅構内は殆ど私の見送りのために埋まってゐる、一隅に小卓をおいて、助手達が名刺をもらってゐる、大学、官庁、会社、俳壇、知人友人親戚、それに学生など数百人、私は夢中で挨拶した、プラットフォームに出るともう身動きも出来ない、学生が万歳を叫ぶ、汽車が動き出す、顔を出して手をふる、これでみんなと暫くのお別れだ。いそ子が神戸まで送ってくれるので同乗、二月の季節とも思はれない美しい暖かい日だ、麦はかがやくやうに青い。

夜、九時梅田駅に着く、杉本捷雄君等迎へに来てくれてゐる、杉本君の家に厄介になる、町中（吉山町）だが、庭に大きい石をおいたりしてなか〳〵よい、大阪らしい。

二月十七日　（水）

天気よし、大阪毎日の木国氏に電話、けふの同人会斡旋のことを謝す。奈良鹿郎氏より電話、昼飯を食ひに来ないか、今夜はのっぴきならぬことで送別会に出られないから——と。又、橙黄

子があなたに会ひたいが、急ぐので、よろしくたのむと言って、昼の汽車で東京に発って行った——と。

私はけふは浜寺の田鶴子を訪ねることにしてゐたので、鹿郎氏の方は好意を謝して断る。いそ子と二人で浜寺にゆく。頼君から電話がかけてあったらしく田鶴子は子供を連れて迎へに来るのにあふ。一日話す。

今夜は関西ホトトギス同人有志の私のための送別会があるので夕景帰る。大阪北区菊屋、酒盃を挙げ、御馳走になる。句も作る、余ふるはず。会するもの木国、旭川、圭草、梅史、青畝、暁水、一杉、としを、播水、桜坡子、爽雨、夜半の十二名、王城は夜を警戒して句のみ投ず、いはほはどうしても行けぬと電話。

盃をふくみ春潮を飲むごとし

二月十八日　（木）

天気よし。京都の王城氏に電話、これから出かけることを通ずる。徳島の千樹来る、私が今日出帆のつもりで来る。いそ子まだ京都を知らざれば三人で新京阪駅から乗車、京都に向ふ。いそ子は千樹に案内して貰ふこととし、私は王城居を訪ねる、王城氏元気に迎へてくれる。虚子先生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

からかういふ手紙が来てゐるとて見せる、青邨は船が一日延びたので、十八日は空いてゐる、青邨は京都はさっぱり知らないから見せてやってほしい、君は病気のことだから、いけないなら誰かに願ひたい、俳諧料理なども面白いかも知れない――こんなことが書いてある、眼の中が熱くなって来た、王城氏はよい先生をもったね――といふ。

桂樹楼君が来る、三人でトースト、ハムエグスで昼食。比古君、素径君来る、五人で自動車で光悦寺に向ふ、鷹ヶ峯、鷲ヶ峯、紙屋川、憧憬のところである、それから祇王寺、□□寺、落柿舎、□□、嵐山に出て、橋の上で写真をとり、皆に別れを告げて帰る。

晩は杉本君が大阪歌舞伎座の鴈治郎追善興行を見せて呉れる、菊五郎、三津五郎等。いそ子、千樹と一緒、千樹は十時の船で帰るとて先に出る。

芝居はねてから道頓堀の牡蠣舟にゆく、もう十二時。

落柿舎にて

縁の下一俵の炭を蔵したり

二月十九日（金）

朝、寝坊す。捷雄君夫妻の心からのもてなし、朝、大鯛を卓上に置き、盃盤を置き、さても余

がための首途を心から祝し呉るるなり。隣りの初二君兄妹も見ゆ。

昼頃、みんな連れ立ちて神戸に向ふ。直ぐ船に入る（日本郵船榛名丸一万余トン）。だん〳〵人が多くなってくる。頼君夫婦、子供二人、菊野君（菊野にも随分久しぶりなり）、杉本一族、鹿郎、播水、楠窓、蘇城、その他の俳人、吉村万治氏代人、山田機関長（日本郵船）——。

出発にもう四十五分といふ頃、水上署が今日は船に行くことが出来ないから出発のスタンプを押して貰ひにパスポートをもって出頭しろといふ、これには全くあはててしまふ、蘇城君が自動車にのせて連れてってくれたので助かる。

もう船は一ぱいの人、誰がどこにゐるやらわからない、ろく〳〵挨拶も出来ない始末、全く困ってしまふ。ジャラ・ジャラン、ジャラ・ジャランと銅鑼が鳴る、テープがとぶ、ひらめく、全く混乱である、螢の光の奏楽。

杉本君、俳人諸君はテープを投げてくれる、四っ五っ手もとに受けとることが出来た、磯子もゐる、田鶴子もゐる、菊野もゐる、みんなだん〳〵遠くなって行った。

鹿郎、一冊の猿蓑評釈（露伴）をくれる。

みんなが去ってしまった室に女もちの洋傘がある、どうも磯子のらしい。

白梅も白波もはや遠ざかる

二月二十日（土）

ゆふべ霧が深かったので船を徐行させた。二時間も遅れて門司に入る。もう十時、日原方舟君迎へに来てくれる、八幡の矢上螢雪君も来る。方舟君は今日は長府を案内したいといふ。そこへ福岡帝大教授井上克己君来る、実は船が一日遅れたことを知らず、昨日は何等音沙汰なし、けふは君を送るために来たのだったといふ。太宰府、都府楼を案内して、宅につれてゆくといふ。

午後三時二十分発の汽車に間にあふやうに帰ることにして、方舟君の好意に従ひ、長府を見物、矢上君も一緒。

井上君と落ちあって太宰府、都府楼見物、太宰府はまことに美しきお宮なり、折から梅花盛りにて、馥郁たる香を送り、白雪繽紛、お石の茶屋にて名物焼餅を三っ食ふ。

今朝、船の廊下でばったり京城大学教授佐藤眉峯君にあふ、義弟がやはりこの船で渡欧するといふ。一本の寒牡丹をくれる。

二月二十一日（日）

床の中で雨の音ぽつぽつ聞ゆ、畳の上、日本夜具の中に寝るのはこれきりかと思ふと心細い。午前六時半起床、井上君夫妻の好意を謝して辞す。福岡から門司までの二時間の汽車はすこし辛

い。

助川千里君門司にて余を迎ふ、大学卒業以来初めて、久濶を叙す。方舟君また船まで送ってくれる。

正午出帆、これで全く日本の地を離れるのだ、風寒ければサロンに入る。雨すこし降れど海は穏やか。とにもかくにも東京の家に無電をうつ。おばあさんと留守してゐる子供達は如何、磯子は多分今日あたり東京に帰ったかも知れない。

卓上の牡丹咲く。

二月二十二日（月）

けふから食卓きまる、大阪帝大助教授堀見太郎、九州帝大産婦人科清水直太郎、農林技師白井勇、一等運転士石原直義、僕。

午後、霧かかり、霧笛を鳴らしつつはしる。十二海里、或はそれ以上でヘビーをかけてゐるらしい、予定より一日遅れてゐるので、どこかで取返すつもりらしい。

霧の中光りくづるゝ波頭

海原や霧笛を鳴らしつづけつつ

昨日三十分時計を遅らせ、けふまた三十分遅らせる、都合一時間内地より遅れてゐることになる。

昼食後、寝台に入り、ホトトギス三月号（門司にて受けとる）を読んでゐるうちに眠ってしまひ、二、三時間の昼寝。

晩は虚子先生に手紙を書く。

越央子内閣書記官長より無電「長江の春の句をまづ便りせよ」。

二月二十三日（火）

霧がかかってゐるので船は徐行。起きて見るともう揚子江の本流からづっと離れて□□へ入ってゐる、いろいろな船が一ぱい繋ってゐる、サンパンがある、漁船がいっぱいその辺で釣をしてゐる、その中をゆく。日本の軍艦が灰色の姿を現はす、出雲であらうか、中将旗が掲げてある、もう一艘ゐる、霧の中に軍艦旗がはためいてゐる。

この辺が江湾鎮だといふ、楊樹がすこし青んでゐる。十時、郵船の波止場に着く、定祥、穆水、秋平の三君が迎へに来る、秋平は中田みづほの令兄、よく似てゐる。今日のスケジュールをうち合はす。

水竹居から三菱支店長宛の紹介状をもらってゐるので、穆水君に案内して貰って三菱にゆく。

田中支店長は旅行不在、武藤幸定氏に面接、更にけふのことを相談。昼飯を三菱の御馳走で、三幸でとる。農林省の白井君も一緒、卓上の春蘭、花数ヶ、よく匂ふ。

春蘭の脂粉のごとく匂へりき

午後雨はげし。

すみれ会接待、自然科学研究所見学、戦跡見物、宝山城見物、市内見物、新市計画。夜は陶々酒家にて支那料理（広東料理）、東本願寺にて句会、揮毫などして午前一時帰船、雨なほ降る。

船に上海日々新聞の記者が来てインタービューをする、写真をとる、夕刊に大きく出る。

二月二十四日（水）

朝ねむし、七時起床、稽水、非文、露頭仏三君挨拶に来る。

八時出帆、小雨。何をするでもないけれど、時間の経つのも早い、飯食ふことのみ大事の仕事なり。食卓にて天然痘の話出づ、余が種痘せざるは大胆なりと、天然痘は空気伝染なり、いつ感染するやもわからずとおどかす、堀見君も清水君も医者なればほんとうのことなるべし、ドクターに種痘して貰ふことを決心す。

食卓の花新しく取りかへらる、水仙、スウィートピー、金盞花、上海街上水仙を行人に売るを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com